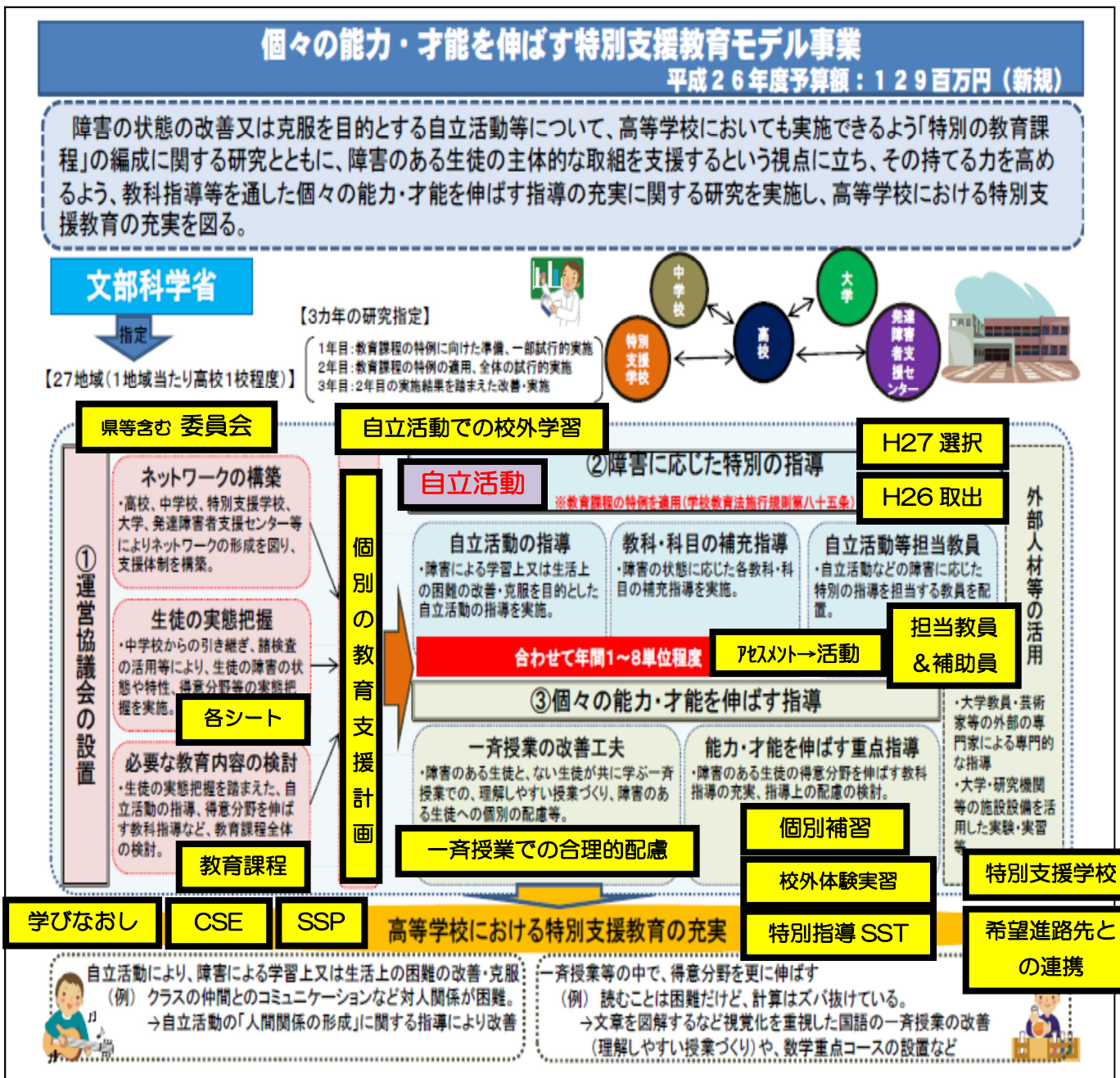


都道府県番号	学校名	課程	学科	指定期間
42	長崎県立佐世保中央高等学校	定時制	普通科	26~28

平成27年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

高等学校に在籍する障害のある生徒の「意思疎通や学校生活・社会に適応する力の育成」を目指す「自立活動等を取り入れた特別な教育課程の編成」および「特別支援学校等と連携した学校設定科目等の学習内容・指導方法等」の研究



【図1】文部科学省研究主題における本校の取組内容の位置づけ

2 研究の概要

本校には「円滑な人間関係を築くことができず、人付き合いへの不安を抱えている生徒」や「中学校までの学習内容が定着していない、学習方法がわからない生徒」などが数多く在籍している。

このような本校生徒の実態を踏まえると、一斉授業等の中でコミュニケーション力を育む指導や学びなおしを重視した学習を取り入れるとともに、特に配慮が必要な一部の生徒に対しては、自立活動や教科の補充のための特別な指導が効果的であると考え研究に取り組んだ。

自立活動や教科の補充のための特別な指導では、平成26年度は1名の生徒を対象に、平成27年度は5名の生徒を対象として、対人関係の改善や学ぶ意欲の向上などの成果が見られた。

一斉授業等の中でコミュニケーション力を育む指導や学びなおしを重視した学習や、それらを推進するためのインクルーシブ教育システムの構築を目指した取組では、「学びなおし」に関する学校設定科目や「総合的な学習の時間」における「CSE（コミュニケーションスキルアップエクササイズ）」の計画的な実施により、学習に対する不安の軽減などの成果が見られたり、全教職員の「特別支援教育」に対する意識の向上が見られた。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究開始時の状況と研究の目的

研究開始時の状況	平成26年度は、長崎県「高等学校発達障害等生徒支援推進事業」の指定を受け、「校内における特別支援教育体制の取組」についての研究を通し、ユニバーサルデザインを推進。 例) わかりやすい授業、学びやすい環境づくり、進路実現を目指した教育支援、「CSE」の開発、個別の教育支援計画等の推進、専門機関・進路希望先との連携システムの構築など
研究目的	○教育課程の特例による「自立活動」を導入するとともに、「すべての生徒にわかりやすい一斉授業の在り方」を研究していく。 ○「通常の学級」「通級による指導」「個別補習」など連続性のある学びの場をシステムとして機能していくための、「インクルーシブ教育システム」を整備する。

(2) 研究仮説

本校には、「円滑な人間関係を築くことができず、人付き合いへの不安を抱えている生徒」や「中学校までの学習内容が定着していない、学習方法がわからない生徒」が数多く在籍している。このような本校生徒の実態や卒業後の就職や進学状況を踏まえると、「自立活動」を中心とした、個々の能力・才能を伸ばす指導が効果的であると考えた。

1) 障害の状態に応じた特別な指導

対象生徒について、自立活動の6区分26項目により実態把握を行い、目標及び具体的な指導内容を設定する中で、本校生徒の特徴として「人間関係の形成」及び「コミュニケーション」の区分及び項目が中心に選定されており、選定された項目の要素には「自己理解と職業理解」「場面認識」「ソーシャルスキルスタディ」「言語理解」の4つの柱があることが浮かび上がった。これらの4つの要素（柱）を関連させた自立活動の具体的な指導内容の設定とその有効性を検証することとした。

※なお、自立活動の指導は、週2コマ（年間70単位時間）を基本とし、生徒の自尊感情に配慮して、選択科目と同じ時間帯に設定する。さらに自立活動で身につけたことを般化させることができるように「校外体験実習」を実施するとともに、保護者や関係機関とも連携した適切な支援ができる体制を確立していくこととした。

2) 個々の能力・才能を伸ばす指導

さらに、上記の自立活動の指導と併せて、「CSE」及び「SSP」をそれぞれ「総合的な学習の時間」と「LHR」の年間指導計画に位置づけて取り組むとともに、「学びなおし」に関する学校設定科目として「ベーシック国語」「ベーシック数学α」「ベーシック数学β」「ベーシック英語」を選択科目として教育課程上に位置付けることで、中学校までの学習内容が定着していない、学習の方法がわからない生徒への教科の補充指導の在り方を探った。

自立活動「SWP（self-help work program）」の導入は、個々に応じた「コミュニケーションや対人関係の改善」「学力向上」等につながると捉えた。

(3) 教育課程の特例

「自立活動及び各教科科目の補充指導に相当する指導」として導入した領域「SWP」の内容は以下のとおりである。

1) 全体

内容等	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数による学習により実施。 ・対象生徒について収集した情報を、自立活動の6区分26項目で整理し、「①言語理解」「②場面認識」「③ソーシャル スキル スタディ」「自己理解と職業理解」の「4本の柱」の視点で優先する指導目標を設定し、指導目標を達成するために必要な自立活動の項目を選定し、選定された項目を関連付けて具体的な指導内容を設定する。
単位等	<ul style="list-style-type: none"> ・通年で、選択科目の一つとして取り扱う。週2コマ（年間70時間）を原則とする。（平成27年度に実施） ・「取り出しによる指導」の場合、1単位（年間35時間）認定することも可能とする。（平成26年度に実施）
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・「長期休業中の集中指導」として、教科の補充のための特別の指導「個別補習」および「校外体験実習」（平成27年度導入）等の推進についても取り組んでいく。

※ 自立活動の「4本の柱」

特例の各内容	活動・内容
①言語理解 ※主に個別補習を中心とした内容	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションに必要な言語の概念形成 ・確実に継続的な学びや学習スキル習得 ・自己の理解と行動の調整に関する姿勢・態度の育成
②場面認識 ※自立活動の指導と個別補習を中心とした内容	<ul style="list-style-type: none"> ・行動や事物を整理し、その原因を推し量る活動 ・登場人物の行動や心理を推し量る活動 ・特定の事象が生じた理由を考える活動
③ソーシャル スキル スタディ ※主に自立活動の指導を中心とした内容	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りのあらゆる生活事項を項目立てる活動 ・時間・提出物等の管理・計画・分担等に関する活動 ・インターンシップ等での協働スキルに関する活動
④自己理解と職業理解 ※主に自立活動の指導を中心とした内容	<ul style="list-style-type: none"> ・自己理解に関する活動 ・職業・他者・事物等の理解に関する活動 ・適性（自己と他者）理解に関する活動

※ 生徒の特徴に合わせた時数配分（例）

特例による活動内容	「自立活動」関連項目例	ケース1 LDの傾向 教科の補充指導重視	ケース2 自閉の傾向 自立活動+教科の補充指導	ケース3 ADHD傾向 自立活動重視
①言語理解	環境の把握 コミュニケーション	30 単位時間	25 単位時間	20 単位時間
②場面認識	環境の把握 心理的な安定	20 単位時間	20 単位時間	20 単位時間
③ソーシャル スキル スタディ	健康の保持 身体の動き	10 単位時間	10 単位時間	15 単位時間
④自己理解と職業理解	人間関係の形成 コミュニケーション	10 単位時間	15 単位時間 (人間関係形成重視)	15 単位時間 (作業訓練等含む)

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

本校では、全生徒対象に「SSP」「CSE」、発達障害等生徒を含む希望生徒を対象に「学びなおし」、特別な支援が必要な生徒を対象に「個別補習」を実施した。また、発達障害等生徒に対する配慮を含む「一斉指導の改善工夫等」に取り組んだ。

1	LHRにおける「SSP」
2	総合的な学習の時間における「CSE」
3	学びなおしに関する学校設定科目 「ベーシック国語」「ベーシック数学α」「ベーシック数学β」「ベーシック英語」
4	教科の補充のための特別の指導「個別補習」
5	一斉授業における合理的な配慮

(5) 研究成果の評価方法

- 「担当職員」「全職員」「対象生徒」「保護者」等を対象にアンケートを実施し、客観的かつ総合的に評価する。
- 生徒の出席状況、生徒の意識調査、学びなおしへの取組状況等を検証していく。

4 研究の経過等

(1) 教育課程の内容等

年次	教育課程の内容等	
1 年次	選択科目	学校設定科目「ベーシック国語」「ベーシック数学α」
	個々を伸ばす指導	●総合的な学習の時間における「CSE」の実施 ●LHRにおける「SSP」の実施 ●教科の補充のための特別の指導「個別補習」
2 年次	選択科目	学校設定科目「ベーシック数学β」「ベーシック英語」
	特例「SWP」	○前半：インターンシップに向け「自己理解と職業理解」を中心に実施 ○後半：進路実現に向け「場面認識」「ソーシャル スキル スタディ」を中心に実施
	個々を伸ばす指導	●総合的な学習の時間において「CSE」を実施
3 年次	特例「SWP」	○卒業後を意識した自立活動を実施する。

(2) 全課程の修了認定の要件

自立活動「SWP」の単位は、本校の全課程の修了を認定する要件として、修得しなければならない単位数に含めることができることとする。

(3) 研究の経過

	主な実施内容等（「評価に関する取組」は除く）
第一年次 (平成 26 年度)	1) 自立活動「言語理解・場面認識」等の指導の実施・検証 2) 生徒の「実態把握」「選択受講方法」の検討・実施 3) 受講対象生徒の保護者の理解・受容に向けた面談等の実施 4) 「学びなおし」「CSE」の実施・検証 5) 「SSP」の検討
第二年次 (平成 27 年度)	1) 自立活動「SWP」等の実施・検証 2) 自立活動「SWP」における「校外体験実習」の実施・検証 3) 「学びなおし」「CSE」の検証・改善 4) 「SSP」「個別補習」の実施・検証 5) 保護者との連携のため、「SWP活動通信」等の発行
第三年次 (平成 28 年度)	1) 自立活動「SWP」等の実施・検証 2) 「学びなおし」「CSE」「SSP」「個別補習」の実施・改善 3) 保護者との連携のため、「SWP活動通信」等の発行 4) 自立活動を目的とした単票の検証 ～生徒の実態把握から評価まで～

(4) 評価に関する取組

	評価内容（○）・研究の評価方法（●）、自立活動自体の評価（★）等
第一年次 (平成 26 年度)	○「SWP」「学びなおし」「CSE」の検証 ●各研究グループで指導内容・指導方法の検証 ★観察（生徒実態把握）、質問紙（アンケート）、面談（保護者） 学力面の検証（定期考査、小テスト、提出物等）等
第二年次 (平成 27 年度)	○「SWP」「学びなおし」「CSE」「SSP」「個別補習」の検証 ●各研究グループで指導内容・指導方法の検証 ★観察（生徒実態把握）、質問紙（アンケート）、面談（保護者） 学力面の検証（定期考査、小テスト、提出物等）等 ★「自立活動用単票（生徒把握から評価まで）」の検討・実施
第三年次 (平成 28 年度)	○「SWP」「学びなおし」「CSE」「SSP」「個別補習」「一斉授業の中で障害のある生徒への個別の支援方法」の検証 ●各研究グループで指導内容・指導方法の検証 ★観察（生徒実態把握）、質問紙（アンケート）、面談（保護者） 学力面の検証（定期考査、小テスト、提出物等）等 ★「自立活動用単票（生徒把握から評価まで）」の実施・検証

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

1) 対象生徒への効果 (○は改善点 △は課題)

●知識・技能面	○生活上のスキルに関する知識向上 ○学習中・学習後、多くの場面における心理的な安定（笑顔等） ○インターンシップにおける対応能力の向上 ○インターンシップ後の人間関係の改善、相談能力の向上
●思考力・判断力・表現力、学ぶ意欲等含む学力	○進路希望が明確化 ○進路に絡めた意識改善にともなう学習意欲の向上
●豊かな人間性	○指示されたことを最後まで行うなど責任能力の向上 ○様々な場面における対応等、知識幅の広がり ○体験的な学習を通じた対人関係の改善、自信の獲得
●たくましく生きるという観点	○進学や就労後の生活スキルなどを学び、卒業後の対応幅の拡充
●人間関係	○中学校時代や入学直後にみせた対人パニックの減少 ○球技における「パス出し」等、瞬時判断パニックの軽減 ○教室への入室しぶりの軽減 ○教師と会話できなかった自閉行動の改善、相談できる力の獲得
●学校・学習への意欲	○「自立活動等の指導」に対する意欲向上 ○「自立活動」で手に入れた自信を転用して「授業」意欲の向上
●生徒の学習上の負担	△「取り出しによる指導」(H26)は、連絡・確認等が負担 ○教育課程に位置づけて受講(H27)により、連絡・確認・移動等負担は軽減

2) 教員への効果

- 「個々の能力・才能を伸ばす指導」の研究により、「わかりやすい授業」「学びやすい環境づくり」「職員全員での取組」等ユニバーサルデザインの意義を再確認することができ、教職員のスキルアップ、特別支援教育に関する意識向上に繋がっている。
- 保護者・生徒の受容がある「自立活動」については、生徒の変容が見えてきたため、特に高い有用性を認めている。

3) 保護者等への効果

- 「SWP」の受講選択時だけでなく、保護者面談時に「SWP」について情報提供を丁寧に行っているため、保護者の思いの確認もできる関係性が構築されてきている。また、「個別の教育支援計画」や「自立活動指導計画」も柔軟に見直しができています。
- 中学校での通級による指導を受けた経験のある生徒の保護者は、「実施継続の安心」と「実施後の満足」を感じている。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

1) 実施上の問題点

自立活動を導入する際、以下の課題を解決していくという形で研究を進めてきた。

①	対象生徒の選定・決定
②	自立活動「SWP」の対象生徒・保護者の理解・受容
③	自立活動「SWP」の効果的な指導方法、指導内容の計画
④	「校外体験実習」の円滑な実施にむけた外部機関との連絡・調整
⑤	教科指導、総合的な学習の時間、LHR、自立活動「SWP」の指導等、それぞれの相互関係性やバランスの検証、及びカリキュラムの編成の検討
⑥	諸表簿における取扱いの整理

2) 今後の課題

これまでの取組の検証を行い、以下の課題を解決していくような取組にしていきたい。

①	対象生徒一人ひとりの特性に応じた自立活動「SWP」の実施計画の作成
②	自立活動「SWP」における「校外体験実習」の組織化・充実
③	障害のある生徒の得意分野を伸ばす教科指導の充実
④	一斉授業の中で障害のある生徒への個別の支援方法
⑤	卒業後の希望進路先、関係機関との連携強化